



Title	東歌の遙けさ 都の鄙と鄙の都
Author(s)	渡部, 和雄
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 19, pp.二三-三〇; 1970
Issue Date	1970-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/32239">http://hdl.handle.net/10069/32239</a>
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T22:01:28Z

# 東歌の遙けさ

— 都の鄙と鄙の都 —

渡 部 和 雄

一

万葉集巻第四に

草嬢歌一首

512 私の田の穂田の苺ばかかよりあはばそこもか人の吾を言なさむ

という歌がある。この題詞「草嬢」はまず一応異例のものと言つて

よい。巻四ではここは人名か、人名に代る地名がある所である。そ

の人名は多くは貴族の名であり、人名に代る地名であつたにしても

709 豊前国娘子大宅女歌一首 未審姓氏

701 河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌一首

521 藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首

などからみて貴族との応対・贈答の中に含まれるものであるのが一

般である。巻四はいずれにしても貴族に関わる歌を集めたいらしい。

こうした環境の中で「草嬢」を「村嬢」（新考）、「田舎娘」

（全釈）、「農村のをとめ」（注釈）と解することは一つの決断、

不図すると大変な決断に違いない。

『私注』では「カヤノイラツメ」とよみ、「カヤは蛟屋忌寸、宿

禰、香屋臣、賀陽朝臣等のいづれかであろう。又舒明天皇の蛟屋皇

子を生んだ吉備国の蛟屋采女もある。」と書いている。巻四の性質

としてはこう考えられる所であらう。

東歌の遙けさ（渡部）

しかし、また貴族の子女の氏姓を、それであるが故に借訓「草」  
を持つてくるのも、同じ貴族階級者の編集の場合どうであらうか。  
先の709「未審姓氏」というのは逆に考えれば、却つて編者が、この  
辺りは「姓氏」があるべきものとして尊重し、その水準にて註記を  
行つたものであらう。とすれば「草」字の借り様は丁重さを欠くこ  
とにならう。

そうしたこともあつて、この「草嬢」は文字通り「田舎娘」であ  
り得るのかも知れない。しかしこれには先に言つたように勇断を必  
要とするだらう。「田舎娘」とすることによつて歌の内質は全く  
違つてくる、こなければならないからである。巻四の宮びの世界に  
全く異質の田舎娘が登場し、この歌は万葉に於て八都の鄙Vの位置  
を保有することになる。

二

鄙というのはそれ自体では鄙であることができない。「草嬢歌」  
という題詞の発想が既に都の風流貴族のものである。田舎娘が自作  
の歌に「草嬢歌」と書くことは決してあるまい。同様にこの一首の  
歌は都の風雅によつて解釈されてくることになる。彼女の歌が万  
葉文学の榮譽ある一端を担う時、その歌は貴族の抒情の系譜の中で  
しか息づけない。

さて沢瀉氏はこの「草嬢」を『カヤの人名に「草」の文字を用ゐ

たものでなく、全釈にも引用せられたやうに草人の語もあり、作の趣から考へても、田舎娘の義にとるべきであらう』（注釈）とされた結論は右にのべたが、なお「考」の所で「これは農村の生活の中に生まれた相聞歌である。作者は忌寸や宿禰などと呼ばれる家柄の娘ではない。名も無き農村のおとめであらう。なほいへば一人の女の作ではない。作者は知られず農村に謡ひ伝へられた稻刈り歌である。」とされる。これははつきり人民謡Vであつたことの宣言であるとみてよいであらう。

## 三

右の歌が民謡であるとすれば、それは巻四での異質にとどまらず、歌それ自体の変質でもある。例えば『注釈』の口訳

秋の田の穂の出た田の刈り場所のやうに、お互が寄り合つたならば、その事で、世間の人は私を何かと言ひ立てる事であらうか。

とさえならないのではないか。『代匠記』以来『私注』に到る、上二句を序のようにとるものは多い。それが多分妥当でないことは本意部の意味から考えてみれば判る。「かより合はばそこもか人の吾を言なさむ」に於て、条件句「かより合はば」が推量句「吾を言なさむ」を導くのは全く当り前のことである。即ちこの二者の接続に不合理はなく、男女が寄り合つたら噂になるのは万葉ならずとも世の常である。この歌は右様のことを歌っているのではない。こう言うのは「そこもか」という媒介の中句が気になるからである。「そこもか」には、恋愛男女の寄り合いに対して拒否的に置かれたであらう語気が感じられる。実は『注釈』ではそのことに詳しく触れられ、「そこもか」の「も」を『古典大系』で「……でさえもの意」と注されているのに賛成し、並列の「も」とされる。

さうだとすると「かよりあふ」の意味はおのづから明らかにならざるを得ない。即ちそれは「許し合ふ」事ではない。……まろびあつておきながら「それさへも」などとぬけぬけと言つたのではなくて、これはまるでその反対の、うぶな娘心である。ただ並んで稲刈をするだけの事、寄り合ふには違いないけれど、手を取るのどのといふのではない、さう自分に言ひ聞かせてみるけれど、つつみきれないのは自分の心、ろくにもも言はないのだが、それでさへもといふのである。

とまことにくわしい。この見事な詳しさの中に矛盾がある。「そこもか」を媒介にする前後が△許し合う√の「かより合ふ」状態ではないとされるのは前・後件に非融合を見とられるからである。だから右の評説は深い配慮から出ているが、それでもなお「口訳」を素直に読めば苦しい所がある。相手が噂なのだから「お互が寄り合つたならば」人の口にはのぼるの当然であらう。ここは二人が・△お互が√寄り合うのではないのであらう。何が寄り合うのかについては「秋の田の穂田の刈ばか」それ自身が示すであらう。この上二句を『注釈』では

金子氏評釈には……初二句を序詞としては「折角の興味ある場面が實際的でなくなり、印象が稀薄で、『寄り合はば』が一向に活きて来ない」と言はれる。この金子氏の説は殆ど顧られていないが、注意されてよい説だと私は思ふ。稲穂であれば、「寄る」とかかるのは当然であるが「穂田の刈ばか」とあつて、刈ばかに疑問はあるとしても、稲そのものでなく、むしろ刈る方の人間の事と見る方が自然であることは認められる。

とされ、上二句を序ではないとの方向に考えられながら、寄り合うのは人間のこととされる、そこに必然的に口訳では上二句が序のよ

うになり「…やうに、お互が」となってくる原因がある。かかる矛盾めく方法を残念がっておられるのが扇畑忠雄氏である。問題は上二句「秋の田の穂田の」十「刈ばか」にかかってくる訳であるが、同氏には『万葉「かりばか」雑考』（「美夫君志」四号）があつて詳しい。

#### 四

「かりばか」は次のように三首に存在する。

512 秋の田の穂田の刈ばかかよりあはばそこもか人の吾を言なさむ

2133 秋の田の吾が刈ばかの過ぬれば雁が音聞こゆ冬かたまけて

3887 天なるやささらの小野に茅草刈り草刈ばかに鶉を立つも

この三例の「かりばか」について扇畑氏は統一的把握をされようとしている。即ち『玉の小琴』から『綜合日本民俗語彙』に到る検討を経られて

「かりばか」の「はか」が今日でも農村に多く使用されており、  
範囲・区域・場所の意味よりも仕事の分担量、労働量の意味において活用されている点から逆推して、その原義は量を主にしたものであったと思われる。

と云われる。この基本線にそつて

(沢瀉) 注釈と(窪田) 評釈とに共通するところは

A 「刈ばか」を一往刈り場所と解すること。

B 初二句と「寄る」との関係を序詞とみないで事実とみること。

C 「寄る」は稲穂のなびき寄ることではなく、「刈ばか」の接近

であり、同時にそこにはたらく男女の接近を意味すること。

の三点であろう。これは「穂に出たるいねのなびきあふごとく」

(代匠記) のような序詞説にくらべで、はるかに緻密に考究された説と思われるが、BとCについて「秋の田の穂田の刈ばか」からただちに「か寄り合はば」へ実意的に接続するとみるのは表現上の不安定が感じられる。さらに「刈ばか」の接近を男女の接近に解するのは、序詞的形式を介さなければ成立しないのではあるまいか。そうしたBとCも、Aの刈り場所説から発想された解釈でなければならぬ。

と言われ、途中で、折角のABC三点の共同的到達点を拒否されることになる。これは不図したら右三点からの後退になるのではなからうか。そして結局

さきに提示した「はか」量、堆積説にみちびかれるならば、秋の田に刈り上げられ、積み重ねられた稲の堆積においては、穂と穂が相接し、寄り合っている状況とみられる。

となつてしまふ訳である。肝腎なことは刈り場所説が排されることになり、序説に還つてしまふことである。これは古代の稲刈は穂首刈であつたらうとされるところから『私注』のツカハカ堆積説に基づくものである。『私注』の

ハカは稲を墓の如く高く積んだものではあるまいか。…上野吾妻郡に田畑を量る単位にツカがある。…或は此のツカと同じものではあるまいか。さすれば刈りとつた稲の堆積をツカともハカとも呼んだものと思われる。

を引かれ「やはり素直に序詞的形式と踏んでいるとみるのが自然である」とされる。『私注』のツカは「田畑を量る単位」であるからそれが直ちに穂首の堆積量になり得るかどうかは疑問であるが、とにかくここで扇畑氏が『私注』の序説に還る理由は判る。しかしそれにしては『注釈』で行われた「そこもか」に関わる悪戦苦闘が簡

単に消えてしまっている。それはとにかく、序としてみた場合の本意部「か寄り合はばそこもか人の吾を言なさむ」を△君と寄り合つたならば、その点を人が評判にするでありましよう△（私注）△お互が寄り合つたならば……△（注釈）としてくるならば、それへの応対は△ああ、そうでしよう△とでも答えるしかないものである。それにしても「ぬけぬけ」（注釈）と△二人が寄り合つたら、世間の人は噂にするでしよう△は歌に仕上げるほどのものであろうか。△しない方が不思議な位△ではなからうか。

扇畑氏が「同感である」とされる初二句の実際性（金子、窪田、沢瀉）がないとして、下三句の本意性の歌であるとしてみれば、同様に氏自身が賛成されている「草簾」の「田舎娘」性、「民謡風」「名もなき農村のをとめ」「謡ひ伝へられた稲刈歌」などの一首の特質は一体何処に行ってしまうのだろうか。この序とされる部分をとりに去って「か寄り合はば」以下がこの歌の内容であるとしたら、右のような性質はこの歌には全く存在しないのである。

## 五

この歌を草簾による民謡と見る限り、矢張りもう一度『注釈』に戻ってみる外はないだろう。上二句を除けばこの歌は「草簾歌」である理由が全くないことになるからである。そして問題の「そこもか」について考えなければならぬことになる。

『大系』には

○そこもか—ソコはそのこと。モは…でさえもの意。カは疑問。とある。それをうけて『注釈』では詳説の上、「それでさえも—と—というのである」とされる。△穂田の刈ばかか寄り合はば△それである

えも△人の吾を言なさむ△という型は、多分「二人が寄り合つた事を人が噂にする」といったようなものではないだろう。△それでさえも△と訳した意識を考えてみればいい。前件を後件が融合的に連結するものでないことは容易に判る。即ち『注釈』にも洞察されているように、前件は後件を拒否し、後件は前件を拒否しようとしているのである。そして作者の意識・感情であろう後件が拒否するのは前件の持つ具体性であるはずである。「秋の穂田の刈ばかか寄り合ふ」は二人が寄り合う実際とは相反するものとしてなければならぬ訳である。三句までが仮定条件の上ののっかっているのもそのためであろう。上三句は偶然を示し、人事に相對する自然として、或は農耕環境としてある。その場だけ切り取ってみれば、これは文学以前の生活形態である。即ち農耕生活の実態に於ては「秋の田の穂田の刈ばかか寄り合ふ」はそれ自体独立して存在しているのである。

さて問題の「刈ばか」であるが、これは諸書引用の様に『玉の小琴』に「道麿云」として「尾張美濃などにて、今田を植るにも刈にも幾はかと云ことあり、たとえば三人して三はかに植、五はかに植、或は五人して三はかに植、などと云也、其図左の如し」とある。これはいわば分担量で、その限りでは『民俗語彙』にもあり、扇畑氏も肯定されるところである。その分担量という点では私もそれに違いないと思う。今も日常そのように使うからである。そして『玉の小琴』では「男女打交りて一つ所に寄合て植も刈もする物なる故に、かよりあふの序とせる也」というのであるが、こうなると矢張り疑問がある。もし右様の訳なら、即ちそうした既定的事実があるなら「か寄り合はば」という仮定条件は存在しないはずである。道麿説の「はか」に固執する限り、図にみられるように男女は

寄り合っていないなければならない状態なのである。しかるに「かより合ふ」のはあたかも偶然によるのであり、「はか」作業での寄り合いの当然さとは違った状況がなければなるまい。また刈ばか(分担量)十か寄り合ふの關係としての序構成で、述語が本意に比喩的に重複するとすれば、これはまた論理外である。刈ばかは植ばかと同じなのだから刈ばかが寄り合うということは存在しない。三人なり五人なりが一ヶ所に存在して一はかなのであって、そのほかが何回か行われ、三人三はか、五人六はかとのようになって刈り終る。はかとはかか寄り合う訳ではない。ただ道麿の書いた図の一はかの中に刈ける三人なり、五人なりの植(刈)株(行)がそれぞれ「ハカ」(分担量)であることは出来よう。これは道麿の図を基にする、単位が個人にあつて、一はかのみ、まといふようになる。即ち個人の持ち株で三はか、五はか、八はかとのようになる。これは会津地方で今も一般的にみられるものである。道麿図の一はかの中にABCDEなど五人が夫々相応の「ハカ」を持つ。二はか目に移る時はA→Eの順序が自由に替り得る。ABCDEともなれば、AEBCDともなる。即ち個人の「ハカ」が偶然に隣り合うことも離れることもある。このような基礎に依れば「刈ばか」「か寄り合はば」が成立し得るし、『注釈』の「穂田を刈ってるうちに、おのづから袖すりあふ事になったならば」という可能性も出てこよう。

しかし一般に労働共同体の真只中では「吾を言なきむ」と言われそうな、無責任な客観性は出てこないのではないか。単位的労働では男女がいくら接近してもそれが噂になることは余りないのではないか。噂が出てくる可能性は同時に共同体の崩壊の上にあつたのではないか。だから噂は共同体を離れ、遠くから客観的に、比較的無責任になされるのである。私は隣り合ったハカ同志の袖の振れ合

いなどを基にしている歌ではないと思う。例えば次の歌のような場合はどうだろう。

2133 秋の田のわが刈ばかの過ぎぬれば雁が音聞こゆ冬かたまけて  
の場合、自分の持株の穂首刈が終つて、それだけで空を仰いでいるなどの風景は考えられない。今はかを持株としたが、例えば一人五株で何人かが夫々の分担量を刈る、といった整然たる進行形は労働共同体には存在しない。能力によってAは五株、Bは八株、Cは十株となる。しかしこれは一瞬毎にどんな風にも変化するのである。要はその二十三株を三人が互に補つて進行するのである。自分の持ち株が終つて、そうした形の上に立って「雁が音聞ゆ」という実際は存在しないのではないか。これはもっと広い範囲、諸注にみられる「持分」でなければならず、「持場」(場所)、具体的には口分田でなければならぬ。「刈分」(新考)、「持分」(金子評釈)

「区域」(窪田)などが正しいのである。『全註釈』に512刈り場所  
2133 刈るべくある場所、2887 刈り取る場所。『私注』に512ツカハカ、  
2133 刈る持場所、3887 刈った部分。などとみられる中の「持分」「刈り場所」が正しいものとみられる。扇畑氏は右の『私注』における512の例外について「場所説だけでは割りきれなかったための一案」と思うとされるが、実は此の辺りから方向が違つてきてしまったのではないかと思われる。どこが原因になつていくかというところ「か寄り合はば」への接続が考えられなかったのである。というのは「か寄り合はば」を本意の如く重いものとしか考えられなかったからである。ここまでは前述の如く農耕生活の実態として、独立して存在し得たのである。ここは素直に文字通り

○持分の刈り場(所)が寄り合つたら

であろう。窪田氏の「秋の田の穂田の刈ばかが接している為に、自然に男と接近するような状態になったならば」は「刈ばか」はとにかくとして、表現面では正しいものと思われる。稲刈の時期は大体決っているから他人の田と隣り合った持分の田を同じ頃に刈るということは全く当然のことである。二者の離れた隅は遠く、近くはアゼを一つ隔てているだけである。

2117をとめらに行相の早稲を刈る時になりけらしも萩の花咲くは農耕者のものではないが、をとめらに行き逢う慣習はそのままこの歌の基礎になっている。今井福次郎氏は「夏と秋との行き合う頃の早稲」（『万葉集の研究』）といわれるが、「娘子らに」は序であるとしてもその実質はあってそのような表現が可能になったのだと思われる。田植や稲刈は必然的に男女が行き逢える作業と場所であった。

## 六

「秋の田の穂田の刈ばかか寄り合はば」は二句までが主語で三句は述語である。表面はそれだけしか出ていないし、そのことがまた大事なのである。人は勿論刈り場所に含まれている。含まれているからこそ刈り場所なのである。しかしそれは表面には出ないのである。△持分の刈り場所が隣り合っただけに▽というだけであり、それが本当なのである。だからこそ「そこもか」が出てくる訳である。後件の「人の吾を言なさむ」を反撥すべき偶然なのである。

万葉にはもう一首、下二句が全く同じ歌がある。

1376 大和の宇陀のまはにのさにつかばそこもか人の吾を言なさむ  
これを「注釈」では「大和の国の宇陀のその赤い色に着いたならば

（あの美しい人と馴染んだならば）その事で人が噂を立てるであらうか。」とする。この疑問に対して答えてみたら矢張り、先と同様△それは立てるだろうな▽としかいいようがないだろう。それは殆んど千古の事実であり、美しい人に馴染んだのを噂にしない世界は却って少ないであろう。ここではあの<sup>512</sup>にみられた鋭い推察はなくなっている。そこでは「そこもか」というのは上・下に挟まれて、ある種の矛盾を表現するもだえであった。後件は前件を容認しないから、噂になるのはある誤解なのである。その誤解の種が「宇陀のまはにのさにつかば」ということである。

宇陀の赤土の色がついたならば、そのことでさえ（それだけでも）世間の人はこの私のことを噂にするだろうか

512と同様「私」だけが噂になるのは相手が殆んど存在しないからである。二人が・お互がといった恋愛的事実はないのである。そこにこそ△噂▽というものの真実の姿がある。なにを噂するのかときかれたら私は△人の噂は分らない▽と答えるしかない。とにかく「宇陀の赤土が着物についたら、それでさえもう噂だろうな」という以外にないのである。どんな条件をどんな噂にするかは人間の自由に属する。その故に△上二句▽そこもか△下二句▽の上下は内容が違い、それを媒介しているのが先述のように「そこもか」なのである。ここを△真はにの色に出ば▽と『私注』が受け取っているように解すれば、当然上二句と下二句は融合連絡することになる。そうすると「そこもか」の役割がなくなってしまうのである。

512の場合は「稲の刈り場所が隣りあったら、それでさえも」なのである。噂は自由で無責任で客観的、傍観的であること既にのべたが、広い農村の中の口分田では、客観的に見て、隣り合った稲刈場所にいる男女は「か寄り合って」見える。実際は何の仲でもないの

に、というよりは労働の重さからは全く無責任なもの、それが噂の正体である。そこをつないでいるのが「そこもか」なのであろう。

七

「はか」（仕事量・持分）は区割されてある場所でもあり得る。それを三首全体に通用出来るかどうか。

2133 については扇畑氏自身

こども「はか」を分担量と解し、「過ぎぬれば」をその量の消化、完了、遂行の意にとつてさしつかえない。刈るべき時が過ぎたというより、分担の刈る量をし終えたといった方が、「雁が音きこゆ」の実感、すなわち例年とほぼ同じ刈り上げの一定量をやると終えたと思うと、今年もいつもと同じように冬かたまけて聞こえる雁が音に一そうつよい感銘をおぼえる作者の心情を受けとることが出来るのではあるまいか。

といわれるが、この「はか」が道麿風のそれでないことは前述の通りである。要するにここは稲刈が終った、持分の全部を刈り終えたという安息の気持があるのだろう、それはまた区割されてある場所ではないのである。ここでの矛盾はないものと思われる。

3887 について扇畑氏は刈った草の堆積の中に鶉をとびたせ、とされるが、それまでにしなくても、持分、草刈り場でよいのではなからうか。うづらは

199 うづらなすいはひもとほり

うづらこそいはひもとほれ

239 うづらなすいはひもとほり

478 暮獵に鶉雉ふみ立て

775 うづらなく古りにし里

うづらなく古りにし里

1588 うづらなく人の古家に

2799 うづらなくふるしと人は

3920 本稿の歌

と八首・九例出てくるが、中199 239の二首三例は人麿のものである。239に「獵路の小野に」とあるように獵に供行しての觀察表現であり、478と共に、人間の生活に、ある意味で親しい存在であった。ここではうづらの生息が人間から拒否的ではなく採用されている。対して四番目以降は、うづらは古く物寂びれた中に、そうした鶉田氣を持つものとして描かれる。昔といえども草刈り場が明るい村の真中であつた訳ではなく、人家を離れた環境の方が多かったのは推量出来よう。その上に木立はあるし山のそびえていることもあろう。そうした鶉田氣の中に突然、鶉を飛び立たせるのではなからうか。一般的には刈り取った跡ではなくて、刈り進む前方の、薄暗い草の中の方がよい。今でも鶉雉の中、雉が飛び立つことなどそう珍らしいことではない。

結局「はか」は三首共、持分・区割されてある場所ですべて一出来るのである。扇畑氏が収穫量の方に統一されたのは『「秋の田の穂田の刈ばか」からただちに「か寄り合はば」へ実的に接続するものと見るのは表現の不安定が感じられる』からという訳であるが、素直によめばこの歌はそれ以外のことを言つてはいないのである。それしか書かれていないから「そこもか」と中継されなければならぬ。実はこれは農耕生活者が読めば何の疑念もなしに、そのまま納



得出来るのである。だからこの難解さは歌の学問の伝統が作り上げたものである。

八

「草麩歌一首」と書かれた時、既に間違いは始まっていた。この題は歌に対する貴族の意識なのである。だから1376「大和の宇陀のまはに」の歌にしても題が「寄赤土」だったり、部立が「比喻歌」だったりするのは必ずしも歌そのものの意図ではなく、編者の一種の歌学に過ぎないとも考えられよう。こうして「都の鄙」は都を基礎にしての鄙でしかないのである。

一方、東歌の地、東国は鮮かに鄙であり得たか、ここもそうではあるまい。仙覚は

3417上毛野伊奈良の沼の大藺草よそに見しよは今こそ勝れ柿本朝臣人麿歌集出也について「よそにみしよはとはよそにみしよりはといふなり。あつまことばにいやしきものの今もいふことば也」と言っている。既に驚愕などはないとは思ふものの、これが「於武蔵国比企郡北方麻師宇郷政所注之了」と記されてある『万葉集註釈』の中の言葉なのである。武蔵国比企郡における万葉歌学者にとってさえ、まだ東歌主体の子孫達は「いやしきもの」であった。この「いやしきもの」達の内容は

3432足柄のわをかけ山のかづの木の吾をかづさねもかづさかずともについて「かつの木とは木のきりのこしたるもとをたき木にせんとて、今も人のはつりとるをかつともいひ、うつともいふ。おほかたるなかのものは木のねなどをほりてたき木にするを」(仙覚)といわれる所にもみられよう。「鳥が鳴く東」はその故に、木や草がまだ支配的な場所であるはずであった。「鳥が鳴く東」は自然の別

名であった。それでこそ「いなか」であり得た。たき木に、きり株を掘りとって使用するなど既に田舎でさえない。仙覚の説の正否ではない。東歌主体は「いなか」者、「いやしい」者であるという認識である。歌学の伝統には一つの恐怖がある。そこにはまだ「いやしきもの」などが棲息出来る場所があったのである。

東歌の歌学も矢張り「鄙の都」に於てしか行われなかった。歌学の伝統はそれが歌学である限り「いなか」であることが出来ないのである。否、歌の学問というものは、真に人間の学問として「都」と「鄙」の関係を超越してしまうことが出来ないのである。こうした日本の歌学の伝統にとって、鄙の歌・東歌とはなんと遙けきことか。